科学研究費助成事業

研究成果報告書



平成 26 年 5月 27 日現在

| 機関番号: 12102 |
|---|
| 研究種目:挑戦的萌芽研究 |
| 研究期間: 2012 ~ 2013 |
| 課題番号: 24655044 |
| 研究課題名(和文)遷移金属錯体を用いた水の酸化反応 |
| |
| 研究課題名(英文)Oxidation of water |
| 而穷少主者 |
| 研先代表有 小良 |
| 小局 唑尼 (KOJIIIIa, Takalitko) |
| 筑波大学・数理物質系・教授 |
| |
| 研究者番号:20264012 |
| 交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円 |

研究成果の概要(和文):本研究では、 [Colll(µ-0H)(TPA)]2(Cl04)4(1)(TPA = トリス(2 - ピリジルメチル)ア ミン)を触媒とする水の酸化反応を行った。錯体1の電気化学測定、DFT計算、および水の触媒的酸化反応におけるH2180 を用いた同位体ラベル実験の結果、錯体1がCo(III)-ビス-µ-オキシル複核錯体に酸化され、分子内で0-0結合形成が進 行することがわかった。また、Ru(II)トリス(ビピリジン)錯体を光増感剤、S208(2-)を酸化剤として、ホウ酸緩衝 液中(pH 9.3)での錯体1を用いた光触媒的な水の酸化反応では、最大触媒回転数742を観測した。

研究成果の概要(英文):We succeeded in catalytic water oxidation using a bis-mu-hydroxo-Co(III)-TPA dimer complex, [CoIII(mu-OH)(TPA)]2(CIO4)4 (1) (TPA = tris(2-pyridyImethyI)amine), as a catalyst. We conducted the catalytic oxidation with a chemical oxidant, [Ru(bpy)3]3+, to observe 02 evolution and excellent stabi lity of 1 under catalytic conditions. Based on detailed electrochemical and isotope-labeling studies, we p roposed a plausible reaction mechanism of the catalytic water oxidation by complex 1, where the oxidation process of the two Co(III) centers to give a bis-mu-oxyl dinuclear Co(III) species is the rate-determining step and intramolecular 0-0 bond formation in the intermediate. Furthermore, we applied the system to pho tocatalytic water oxidation using a Ru-based photosensitizer and persulfate as an oxidant in borate buffer at pH 9.3. We obtained the maximum TON of the photocatalysis to be 742, together with the highest quantum yield of 88%, for the dioxygen production.

研究分野:化学

科研費の分科・細目:基礎化学・無機化学

キーワード: 触媒・化学プロセス 再生可能エネルギー コバルト錯体 水の酸化反応 プロトン共役電子移動

1. 研究開始当初の背景

現在、光エネルギーを化学エネルギーに高 効率に変換できるシステムの開発が、世界中 で活発に行われている。なかでも、光エネル ギーを用いた水の完全分解(2H₂O → 2H₂ + O₂)は、エネルギー問題解決に向けて、大きな 課題の一つである。その半反応である水の酸 化反応は、光合成反応中心でも、水から電子 を取り出すために行われており、マンガン-オキソクラスターがその触媒作用を担って いる。また人工的に合成した遷移金属錯体を 触媒に用いて、水の酸化反応を行う研究が、 近年、盛んに進められている。これまで人工 的に合成された水の酸化触媒としては、主に ルテニウム錯体が利用されてきた。これに対 し、最近、Nocera らは、Co^{II}イオンを活性点 とする水の酸化触媒系を報告した(Kanan & Nocera, Science 2008, 321, 1072.).

2. 研究の目的

本研究では、ピリジルアミン配位子を有す る耐久性の高い Co(III)複核錯体を触媒とす る、高効率な水の光触媒酸化系の構築を目的 とした。特に、Co(III)錯体が、安定なµ-パー オキソ錯体や、酸素錯体を形成することを利 用して、酸素-酸素結合形成過程の反応機構 を詳細に議論することを目指した。

研究の方法

本研究では、水の酸化触媒として、4座配 位子であるトリス(2-ピリジルメチル)アミン (TPA)を配位子に有する、ビスu-ヒドロキソ -Co(III)複核錯体(1)を合成した(Figure 1)。 Co(III) 複核錯体1の前駆体となる Co(III)-ジク ロロ錯体の合成は、Co^{II}Cl₂·6H₂O と TPA 配位 子を反応させ、H2O2でColl中心を酸化して行 った(Massound, et al. J. Coord. Chem. 2007, 60, 2409)。得られた Co(III)-ジクロロ錯体を水中 でAgPF₆と反応させ、複核錯体1とした。錯 体1の結晶構造は、X線結晶構造解析により 決定した。緩衝水溶液中において1の分光学 的滴定を行い、この錯体のヒドロキソ架橋部 の pK_aを、pK_a1 = 4.3 (単核に解離)、pK_a2 = 6.8、 pK_a3 = 10.9 と決定した。また、緩衝水溶液中 において、pHを変化させながら錯体1のCV 測定を行い、触媒電流を観察した。



Figure 1. ビスµ-ヒドロキソ-Co(III)複核錯体 (1)の構造.

4. 研究成果

CV 測定の結果、錯体 1 は大きな触媒電流 を示した (Figure 2a)。この触媒電流が 0.1 mA に達するのに必要な電位の pH 依存性を求め たところ、各 pH 領域に存在する錯体 1 の化 学種に応じて、pH 5.5~8 の領域では 2H⁺/2e⁻ のプロトン共役電子移動 (PCET)、pH 8~11 の領域では H⁺/2e⁻の PCET、それより大きな pH 領域では 2e⁻の電子移動過程を観測した (Figure 2b)。この結果より、錯体 1 による触 媒反応の律速段階は、Co(III)中心が 1 電子酸 化される電子移動段階であると考えられる。 錯体 1 の 2H⁺/2e⁻の PCET 酸化生成物に関する DFT 計算を行ったところ、ビス μ -オキシル -Co(III)複核錯体であることが示唆された。



Figure 2. (a) B.-R.緩衝液中、種々の pH にお ける錯体 1 (0.44 mM)の CV (掃引速度: 100 mV s⁻¹). pink: pH 6.0, orange: pH 7.9, green: pH 10.1, blue: pH 12.0, black: pH 6.0 におけ るブランク. (b) 1.0 × 10⁻⁴ A の電流値を示 す電位を pH に対してプロットした図.

CV において観測された、触媒電流が水の 酸化によるものであることを確認するため に、ブリトン・ロビンソン(B.-R.)緩衝液中に おいて錯体 1 と酸化剤[Ru^{III}(bpy)₃]³⁺を反応さ せ、ガスクロマトグラフ測定することで、酸 素が発生していることを確認した。この時、 pH 8 における酸素発生量から求めた触媒回 転数(TON)は4.3 だった。また、H₂¹⁸Oを溶 媒に用いた同位体ラベル実験により、水が酸 素源であることが裏付けられた。このとき発 生した酸素の同位体比から、1回転目の酸素 発生は、錯体1の架橋配位子である0原子が 分子内で結合して酸素となっていることが 示された。また、酸化反応前後の¹H NMR ス ペクトルの比較を行い、酸化反応中に錯体 1 が分解していないことを確認した。

以上の結果から、錯体1による水の4電子 酸化反応機構としては、Figure 3に示す過程 が推測された。ここでは、酸化活性種は Co^{III}₂(µ-O•)₂中心を持つ錯体であると考えら れる。

さらに、錯体**1**を用いて、[**R**u(bpy)₃]³⁺を光 増感剤、**S**₂**O**₈²⁻を犠牲酸化剤とした、光駆動



Figure 3. 推定される錯体1による水の酸化 反応機構 (TPA 配位子は省略).

による水の酸化反応を試みた。まず錯体1を 触媒とした光駆動の水の4電子酸化反応に ついて、酸素発生反応の量子収率を求める実 験を行った。アクチノメーターとして K₃[Fe(C₂O₄)₃]を用い、420 nmの入射光に対し て、酸素発生量を酸素センサーによって検出 した結果、光酸素発生の量子収率を88%と決 定した。また、[1] = 0.4 mM、[[Ru(bpy)₃]²⁺] = 0.1 mM、[S₂O₈²⁻] = 3 mM (B.-R.緩衝液中、pH 9.3、 5 mL)の条件において、酸素収率の最大値 72%が観測された。また、B.-R.緩衝液 (pH 9.3、 5 mL $(12.5 \text{ mmol}), [Ru(bpy)_3]^{2+} (3.1 \text{ nmol}),$ S₂O₈²⁻ (0.25 mmol)を溶かし、光照射開始から 1.5 h 毎に[Ru(bpy)₃]²⁺ (3.1 nmol)、 $S_2O_8^{2-}$ (0.25 mmol)を加える操作を計3回繰り返したとこ ろ、最も高い TON 742 を観測した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に は下線)

〔雑誌論文〕(計 14 件)

- <u>T. Ishizuka</u>, S. Ohzu, <u>H. Kotani</u>, Y. Shiota, K. Yoshizawa, <u>T. Kojima</u>, "Hydrogen Atom Abstraction Reactions Independent of C-H Bond Dissociation Energies of Organic Substrates in Water: Significance of Oxidant-Substrate Adduct Formation", *Chemical Science*, 査読有, 5(4), 1429-1436 (2014), DOI: 10.1039/c3sc53002g
- ② <u>T. Ishizuka</u>, M. Sankar, <u>T. Kojima</u>, "Control of the Spatial Arrangements of Supramolecular Networks Based on Saddle-Distorted Porphyrins by Intermolecular Hydrogen Bonding", *Dalton Transactions*, 査読有, **42**(45), 16073-16079 (2013), DOI: 10.1039/ c3dt51467f
- ③ A. Takai, T. Yasuda, <u>T. Ishizuka, T. Kojima</u>, M. Takeuchi, "A Directly-Linked Ferrocene-Naphthalenediimide Conjugate:

Precise Control of Stacking Structures of π -Systems upon Redox Stimuli", *Angewandte Chemie International Edition*, 査読有, **52**(35), 9167-9171 (2013), DOI: 10.1002/anie.201302587

- ④ <u>T. Ishizuka</u>, Y. Saegusa, Y. Shiota, K. Ohtake, K. Yoshizawa, and <u>T. Kojima</u>, "Multiply-Fused Porphyrins—Effects of Extended π-Conjugation on the Optical and Electrochemical Properties", *Chemical Communications*, 査読有, **49**(53), 5939-5941 (2013), DOI: 10.1039/C3CC42831A
- ⑤ M. Makino, <u>T. Ishizuka</u>, S. Ohzu, H. Jiang, <u>H. Kotani</u>, <u>T. Kojima</u>, "Synthesis and Characterization of an Azido-Bridged Dinuclear Ruthenium(II)-Polypyridylamine Complex Forming a Mixed-Valence State", *Inorganic Chemistry*, 査読有, **52**(9), 5507-5514 (2013), DOI: 10.1021/ ic400412f
- (6)T. Sawaki, T. Ishizuka, M. Kawano, Y. Shiota, Κ. Yoshizawa, Τ. Kojima, "Complete Photochromic Structural Changes of Ruthenium(II)-Diimine Complexes, Based on Control of the Excited States by Metallation", Chemistry - A European Journal, 査読有, 19(27), 8978-8990 (2013), DOI: 10.1002/ chem.201300437
- ⑦ H. Mitome, <u>T. Ishizuka</u>, Y. Shiota, K. Yoshizawa, <u>T. Kojima</u>, "Heteronuclear Ru^{II}Ag^I Complexes Having a Pyrroloquinolinequinone Derivative as a Bridging Ligand", *Inorganic Chemistry*, 査読有, **52**(5), 2274-2276 (2013), DOI: 10.1021/ic302617b
- ⑧ Y. Inui, M. Shiro, <u>S. Fukuzumi</u>, <u>T. Kojima</u>, "Formation of a Supramolecular Assembly between a Na⁺-Templated G-quartet and a Ni(II)-Porphyrin Complex", *Dalton Transactions*, 査読有, **42**(11), 3779-3782 (2013), DOI: 10.1039/c3dt33034f
- ⑨ Y. Inui, M. Shiro, <u>S. Fukuzumi</u>, <u>T. Kojima</u>, "Quartet Formation of a Guanine Derivative with an Isopropyl Group: Crystal Structures of "Naked" G-quartets and Thermodynamics of G-quartet Formation", *Organic & Biomolecular Chemistry*, 査読有, **11**(5), 758-764 (2013), DOI: 10.1039/c2ob26877a
- ① Y. Inui, M. Shiro, T. Kusukawa, <u>S.</u> <u>Fukuzumi</u>, <u>T. Kojima</u>, "A Triangular Prismatic Hexanuclear Iridium(III) complex Bridged by Flavin Analogues Showing Reversible Redox Processes", *Dalton Transactions*, 査読有, **42**(8), 2773-2778 (2013), DOI: 10.1039/ c2dt32535g
- I S. Ohzu, <u>T. Ishizuka</u>, Y. Hirai, <u>S. Fukuzumi</u>, <u>T. Kojima</u>, "Photocatalytic

Oxidation of Organic Compounds in Water by Using Ruthenium(II)-Pyridylamine Complexes as Catalysts with High Efficiency and Selectivity", *Chemistry – A European Journal*, 査読 有, **19**(5), 1563-1567 (2013), DOI: 10.1002/chem.201203430

- ② <u>石塚智也</u>、小島隆彦、遷移金属錯体のフォトクロミック挙動、光化学、査読無、 44(2), 65-72 (2013).
- S. Ohzu, <u>T. Ishizuka</u>, Y. Hirai, H. Jiang, M. Sakaguchi, T. Ogura, <u>S. Fukuzumi</u>, <u>T. Kojima</u>, "Mechanistic Insights into Catalytic Oxidations of Organic Compounds by Ruthenium(IV)-Oxo Complexes with Pyridylamine Ligands", *Chemical Science*, 査読有, **3**(12), 3421-3431 (2012), DOI: 10.1039/c2sc21195e
- ① <u>T. Ishizuka</u>, M. Sankar, Y. Yamada, <u>S. Fukuzumi</u> and <u>T. Kojima</u>, "Porphyrin nanochannels reinforced by hydrogen bonding", *Chemical Communications*, 查読有, **48**(52), 6481-6483 (2012): A themed issue on "Porphyrins and Phthalocyanines", DOI: 10.1039/c2cc31142a

〔学会発表〕(計 2 件)

- 渡邉温子、<u>石塚智也</u>、和田亨、加藤慧、 <u>小谷弘明、福住俊一、小島隆彦</u>、「複核コ バルト(III)-ピリジルアミン錯体による 水の4電子酸化反応」、日本化学会第93 春季年会、平成25年3月25日、立命館 大学(滋賀)
- ② 渡邉温子、<u>石塚智也</u>、和田亨、加藤慧、 <u>小谷弘明、福住俊一、小島隆彦</u>、「複核コ バルト(III)-ピリジルアミン錯体による 水の4電子酸化反応」、第45回酸化反応 討論会、平成24年11月17日、名古屋市 立大学(愛知)

〔図書〕(計 1 件)

 <u>S. Fukuzumi</u>, <u>T. Kojima</u>, Organic Nanomaterials (Eds: T. Torres, G. Bottari), John Wiley & Sons, New Jersey, USA, 2013, 601(131-146).

〔産業財産権〕 〇出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

[その他]

ホームページ等 http://www.chem.tsukuba.acjp/kojima/Site/Home .htm.

6.研究組織(1)研究代表者小島 隆彦(KOJIMA, Takahiko)

筑波大学・数理物質系・教授 研究者番号:20264012

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者
石塚 智也(ISHIZUKA, Tomoya)
筑波大学・数理物質系・講師
研究者番号: 20435522

小谷 弘明(KOTANI, Hiroaki)筑波大学・数理物質系・助教研究者番号: 10610743

福住 俊一 (FUKUZUMI, Shunichi)大阪大学・工学研究科・教授研究者番号: 40144430